

「みんな違ってみんないい」のか？～相対主義と普遍主義の問題  
後半

山口裕之 ちくまプリマー新書 2022

復習

第二章まで

○相対主義と普遍主義についての歴史的な展開  
 普遍主義→集団としての相対主義→個人としての相対主義→「人それぞれ」  
 ↓

○筆者の主張 「普遍主義」も「相対主義」もまちがっている  
 「正しさ」をみんなで作り上げていくことが大切

○筆者の哲学的立場 構築主義（第四章 p. 153-154）

道徳的な正しさを作るための対話の出発点

個々人の道徳感情（第三章）

正しい事実を作るための出発点

感覚器官による知覚（第四章）

第三章 「道徳的な正しさ」を人それぞれで勝手に決めてはならない

・ 人間の生物学的な傾向に従うことが正しいとは限らない  
 ↓

「事実としてそうである」と「そうすることが正しい」ということは別

↑

自然主義的誤謬 事実によって道徳や倫理を説明しようとする

・ みんながやっているからといって正しいとは限らない  
 ⇨ 正しさは多数決では決まらない

・ 「正しさ」は個々人が勝手に決めてよいものではなく、それに関わる他人が合意してはじめて「正しさ」になる

○「道徳的な正しさ」に対する筆者の考え方  
 「道徳的な正しさ」＝「他人に対する行為や他人を巻き込む行為の善悪」

「正しさ」は他人を巻き込むものであるからこそ、  
個々人が勝手に決めてよいものではない

## ●「道徳的な正しさ」に対する「功利主義」の考え方

**功利主義** 現在の倫理学の主流 功利主義≠利己主義 幸福中心主義  
「最大多数の最大幸福」を普遍的原理とする「真実の一つ」という立場

### ・功利主義への批判①

「他人の幸福をどうやって測ることができるのか」

「スーパーで何を買うか」の例

### ・功利主義への批判②

「社会全体の幸福が増大するなら誰かが不幸になってもよいのか」

「経済学」における「功利主義」の影響

→サンデルの経済学批判 「それを得るのにふさわしくない人がいく  
ら欲しがっても得られないもの、与えるべきではないものがある」

事実として人間は、経済学的に効率的な資源の配分や社会的な効用の最大  
化とは別の価値判断を行うことであり、それにもとづいて行動することも  
ある

## 具体例

### ●最後通牒ゲーム

A 千円渡す Bにいくらかを分け与える

Bが受け入れたらABともにもらえる

平均するとおおむね三割から四割

人間は、自分の利益をなげうってでも、利益を独占しようとする「不正な  
人間」を罰しようとする

## 感情

### ●人間における生物学的要素は感情にあらわれる

「好ましい・喜ばしい」といった感情や、「嫌悪・怒り」といった感情が、  
単なる経済的な損得勘定とは異なる「道徳的な善悪」という領域を開く

### ●道徳感情についての進化論的な謎

・「正しさ」とは、どのようにふるまうことが道徳的に正しいのかについて  
の共通了解

- ・ある行為について善や悪だと個人が感じることとその行為が善や悪だと社会的に合意されることとは別
- ・他人と助け合うことに大きな喜びを感じる感性  
不正に対する怒り →通常の進化論では説明できない

### 進化倫理学による説明

間接互惠の理論 リチャード・アレクサンダー  
情けは人のためならず？

直接的な見返りが期待できない相手に親切にすることで、社会の中での評判がよくなるので、結局のところその人の評判がよくなる

#### ●動物には感情はあるが、「正しさ」はない

動物において「コミュニケーション」は意図的に行われるものではなく、自然に表れる表情や身振りから相手の感情や行動の意図を推測するという一方的なもの

#### ●動物には叫び声はあるが言語はない

人間の言語の著しい特徴は、言葉の指示する対象がその場にないときにも発せられるということ

#### ※著者の「言語観」

言語を学ぶために必要なことは、声を出すことが伝達行動であることへの理解であり、その理解が達成できるように生得的に備わっているものは「自分の感情や意図を仲間に伝えたい」という感情や欲求だと考えている

#### ●人間は新しい行動を創造し伝達する

人間は生物学的な要因によって規定された行動以外の行動も行うようになり、新たな社会のあり方や文化が創造されていきます。そうして他者との間で創造されていくものの一つとして「正しさ」というものもある

#### ●「正しさ」を作っていかなければならない場合

「正しさ」への合意形成がどのようにして行われるか ポイントは二つ

- ①道徳感情が人類普遍的であり、それをもとに形成される社会のあり方にも人類普遍性があるからといって、それが「正しい」とは限らない
- ②個々人が感じる道徳感情と善悪そのものとは異なる

## ●社会的な序列は半なかば本能的に作られる

事実として、さまざまな文化や社会において、年齢や性によって社会的序列や役割が割り振られている。これは、なかば本能的な行動である。つまり、参加者がお互いに合意して作られたものではない。

序列に納得できない人もいる。

例「自己主張する女性」に対する「オジサン」の感情

「生意気な女」に対する怒りの感情

「不公正な自分」に対する後ろめたい感情の葛藤

人間の場合は、感情から一步意識を遠ざけ、事実と論理にもとづいて思考することでなすべき行動を判断する余地がある

人間は、おそらくは生物学的に感じてしまう感情を出発点として、それを自分たちなりに意味づけ、他人にその意味づけを伝え、話し合うことで「正しさ」の体系を自分たちで作っていく

## ●ルールを正当化する手続きの正しさ

当事者が関わらないところで勝手に決めたルールを強制することはそれ自体不正である → 「代議制民主主義」の限界

「より正しい正しさ」はある

「正しさを作っていくための正しい手続き」により、「より正しい正しさ」を実現するよう努力して行くことが大切

## ◎まとめ

功利主義の倫理学、新自由主義の経済学は、  
「最大多数の最大幸福」が唯一の原理

しかし、人間は、正しいことと不正なことを感じる感情の仕組みを持つ

「個人が正しいと感じること」と「正しいこと」とは別

「個人が不正だと感じること」と「不正」は別

「正しさ」とは「どのようにふるまうことが道徳的に正しいのかについての共通理解」

## 第四章 「正しい事実」を人それぞれで勝手に決めてはならない

### ○「事実は人それぞれ」と主張する人たち

「事実は人それぞれ」でも「真実は一つ」でもなく、正しい事実はそれに関わる人たちで作っていくものである

#### ○ものの見え方は人それぞれでない

- ・正しい事実は他の人と共同で作っていかなければならない
- ・物の知覚が共有されていることは世界について共通理解を作っていく前提である
- ・自分たちに都合が悪いものは存在しないと張り切る人たちとは、共通理解を作っていくことはできない
- ・ものを考えるときには自分の信念ではなく、事実と論理に従わなくてはならない

わたしたちが知覚している世界はすべて私たちが作り出したイメージである  
→ 「水槽の中の脳」

私が知ることができるのは私の意識に現れたものだけ

→ 「水槽の中の脳」の議論は無意味

### ●実在論の復権

マルクス・ガブリエル

存在はコンテクストに応じて多様な現れ方をするが、その多様性それぞれに実在性がある

筆者の立場は、「実在論」ではなく  
存在の多様性と実在性を両立させようとするもの

### ●実在論の問題点

「意味の場に現れたさまざまなもの」が誰にとってもそのように現れることを理論の出発点としている

事実としては受け入れるが、  
そのような事実が現実となるために何を飛び越えなくてはならないのかを考察することが大切

## 【科学、数学の世界】

- ・物理学は、論理的・普遍的でありながら、歴史的・一回的なものでもある
- ・2次方程式の解の公式は、「存在」していたのではなく、「発明」されたのである
- ・「論理」は必然であるが、「偶然」でもある
- ・科学的発見の前と後には、論理では越えられない溝がある

### ●技術体系は自律化する

自動車の例

「数学」も同様

数学という領域が開かれたことに必然的な根拠はなく、人間の欲求や関心に即してだった

「意味の場」を開くのは人間の欲求や関心の持ち方 = 人と物との関わり方

### ●落下の法則はどうして「正しい」のか

落下の法則がいつでも成り立つのは、実験用の機械がいつでも同じ仕方で作動するから

法則がいつでも成り立つこと(必然)は、法則を証明するための機械がいつでも同じ動作をするという人間の試行錯誤の結晶(偶然)に依存している

### ●天動説は現在では「使われることのなくなった機械」

「まちがった機械」だから使われなくなったのではなく、特殊な目的にし  
か使えない機械だから。

### ◎まとめ

科学における「正しい事実」は、人間がある対象を思い通りに動かすことができる「技術」と表裏一体のものとして発明される

「正しい事実」を知るために

科学者が「正しい事実」を作っている

- ①誰が言っているのか確認する
- ②複数の専門家の見解を調べてみる

## おわりに 「人それぞれ」はもうやめよう

これまで述べてきたことのくりかえし

「正しさは人それぞれという主張」

事実としても道徳的な態度としてもまちがっている



「正しさは人それぞれ」でも「真実の一つ」でもなく、  
「正しさはそれに関わる人々が合意することで作られる」ということ

「正しさは人それぞれ」は、自分自身の正しさの根拠や理由についても  
考えない態度を助長する

「この人の考えていることはわからない」と思ったとき

いったいどういう関心にもとづいて、何の目的でそのように考えてい  
るのかを聞いてみれば、わかることが多い



お互い納得するまで「話し合い」を続ける



なるべく暴力をなくして、「より正しい正しさ」を作っていくように努力  
することが正しいこと

### ○「感情の尊重」という風潮に対する批判

「なんでも感じ方しだい」というような言葉は、困っている人を励ますよい  
言葉のように見せかけておいて、その実、困っている人を困った状況に放置  
する態度を助長する言葉

人それぞれはもうやめよう

### 【感想など】

①倫理学の歴史、「普遍主義」から「相対主義」の流れがよく  
わかった。

②筆者の考え方【「構築主義」について初めて知った】は、な  
んとなくは理解できたが、具体的に「正しさ」を作り上げてい

くプロセスについては、現実の具体的な例があまり見られず、説得力があるとまでは言えなかった。

③「人それぞれ」の風潮が強い「現状」についての「批判」という意味においては、とてもよくわかる論であった。

④どんな「レベル」においても、意見の違うもの同士の「議論」「話し合い」「語り合い」は大切であると感じた。

【参考】 綿野恵太

「正しさは人それぞれ」といって他人との関係を切り捨てるのでもなく、「真実はひとつ」といって自分と異なる考えを否定するのでもなく———相対主義と普遍主義の問題を考える『「みんな違ってみんないい」のか?』を、文筆家の綿野恵太さん（『「差別はいけない」とみんないうけれど。』『みんな政治でバカになる』）に読み解いていただきました。（PR 誌「ちくま」8月号より転載）

本書によれば、「新自由主義」は「人それぞれ」の思想である。だとしたら、私が「新自由主義」に最初に触れた曲は、SMAPの『世界に一つだけの花』になる。「みんなちがって、みんないい」というフレーズで知られる、金子みすゞの詩「私と小鳥と鈴と」が小学校の教科書に掲載されたのは一九九六年。読んでいてもおかしくないが、残念ながら記憶にない。むしろ、鮮明に覚えているのは、二〇〇三年の紅白歌合戦で大トリを務めたSMAPが歌った「No.1にならなくてもいい もともと特別な Only one」だ。

調べてみると、フェミニズムへのバックラッシュの中心にいた保守派評論家が「ジェンダーフリー、同性愛奨励の歌」と批判したそう。左がかった教師が生徒に歌わせて洗脳している、という彼らの批判は妄想じみている。とはいえ、新自由主義は「多様性」を尊重するように見えるので、マイノリティに親和性があるのはたしかだ。一九六八年の政治運動もネオリベに骨抜きにされたと言われる。しかし、新自由主義が実現したのは、「花屋の店先に並んだいろんな花」というような、商品の「多様性」ではないか。名前も知らない、誰も気づかないような花は「あの日」という過去にしかない。あらゆるものが商品化され、資本に包摂されたあとの光景である。

『世界に一つだけの花』は競争社会に疲れた人々を癒したとされる。しかし、



いまはこう聞こえる。血みどろの競争が広がる「レッドオーシャン」ではなく、あなたの個性と創造性で未知なる市場＝「ブルーオーシャン」を開拓せよ。ジェンダー、セクシャリティ、ナショナリティといったあらゆる属性もおのれの資本として活用せよ。新しい地図を片手に？ しかし、YouTubeで裾野が広がったとはいえ、みずからの花を咲かせられるのは、SMAPのような一部の人しかいない。

本書が主張するように、「どうしたら多様な個々人が抑圧されないようにしながら多数の人たちが連帯できるのか」というかつての政治運動の課題が残り続けている。「正しさは人それぞれ」（相対主義）では、人々はバラバラにされてしまう。かといって「真実の一つ」（普遍主義）にも立ち戻ることもできない。そのため本書は「正しさはそれに関わる人々が合意することで作られる」ことを示そうとする。

「正しさは文化によって異なる」（文化相対主義）とよく言われるが、文化はあくまでも人間の生物学的な本能や習性に基づくために、その違いは限りがある（第2章）。たとえば、成人男性が政治的に優位に立つ傾向はさまざまな文化で見られる。しかし、「事実としてそうである」からといって「そうすることが正しい」わけではない（自然主義的誤謬）。人間には、不正に対して怒り、助けることに喜びを感じる「道徳感情」が備わっている。だが、「道徳感情」は生物学的な本能に由来するものでしかなく、「道徳的な正しさ」はそれにかかわる人々との対話や議論を通じてつくられるべきである、と（第3章）。

人間には「感情から一步意識を遠ざけ、事実と論理にもとづいて思考することですべき行動を判断する余地」がある。本書はそこに全幅の信頼を置いているからこそ、新書の鑑というべき、とても啓蒙的・教育的な内容になっている。「人それぞれ」と思考停止せず、感情的に罵詈雑言を投げつけるのではなく、事実と論理に基づいて互いに理解し合う努力を惜しむべきではない。そのことを事実と論理によって呼びかけ、わかりやすく教えてくれる。

しかし、著者の独自性が最も発揮された第4章。マルクス・ガブリエルの実在論が吟味され、「正しい事実」も他者との共同作業でつくられることが示されるが、トランプ政権の報道官のような「ガラ空きの広場の写真を見て「史上最高の人出」と言い張る人たちを論理的に説得することはできない」とも記されている。前提そのものを共有しない人々に呼びかけても、事実や論理は虚しく響くだけなのか。結局は暴力で強制・排除するしかないのか。もしかしたら、それは事実や論理ではないかもしれないが、こちらの戦列に来てもらえるような言葉を探したいと私は思っている。